

## 猿投窯型瓦塔の展開（2）

### —猿投窯型以前—

永井邦仁

東海地域において猿投窯型瓦塔が量産化される以前、およそ8世紀前半の瓦塔を検討する。尾張・三河・遠江国域で数点ずつ確認できた瓦塔では、軸部上端に庇状・簾状粘土帯を付加することによって組物を表現する技法が採用されていた。この技法は猿投窯型瓦塔の空中粘土帯技法に通ずるもので、当該期の瓦塔がその原型になっていたと結論づけた。そして庇状・簾状粘土帯技法は、関東地域の8世紀前葉～中葉の瓦塔にもみられ、両地域の瓦塔をつなぐ手がかりになるものと見通した。

### 遠江の瓦塔

本稿では、遠江国域の瓦塔について検討するところから始めたい。なぜなら、この地域も猿投窯型瓦塔の分布域であるが、猿投窯型に先行する瓦塔も存在するからである。

現在の静岡県はかつての伊豆・駿河・遠江国である。そこでの古代瓦塔の分布は伊豆・駿河国域では数例にとどまるのに対し、遠江国域では11例と格段に増加する（図1）。このうち見付端城遺跡（静岡県磐田市：図2-7）と宇志（静岡県浜松市：図2-10）の瓦塔は、空中粘土帯と壁付粘土帯を組物表現に採用する猿投窯型B2類である。この他屋蓋部のみの出土で確定的ではないが、二子塚17号墳瓦塔（磐田市：図2-6）

と十二所遺跡瓦塔（静岡県浅羽町：図2-8）が猿投窯型である。二子塚17号墳は後期古墳で須恵器が出土した。墳丘上に立てられていた可能性もあろう。瓦塔は平瓦を一枚ずつ表現する猿投窯型C類で、近隣では出土例がない。十二所遺跡は中世の居館を主体とする遺跡であるが、1点のみ出土した瓦塔屋蓋部は猿投窯型A類と考えられる。

見付端城遺跡の出土土器は9世紀代以降の灰釉陶器が主体である\*。宇志出土瓦塔は、空中・壁付粘土帯に凹凸を加えて複雑化させつつ、見えにくい部分の省略を進めたもので、猿投窯型B2類の中でも後出的な位置づけができる。この瓦塔出土地点付近からは黒笹90号窯期以降

\* 磐田市教育委員会1993。瓦塔が出土した5号落ち込みは中世以降である。

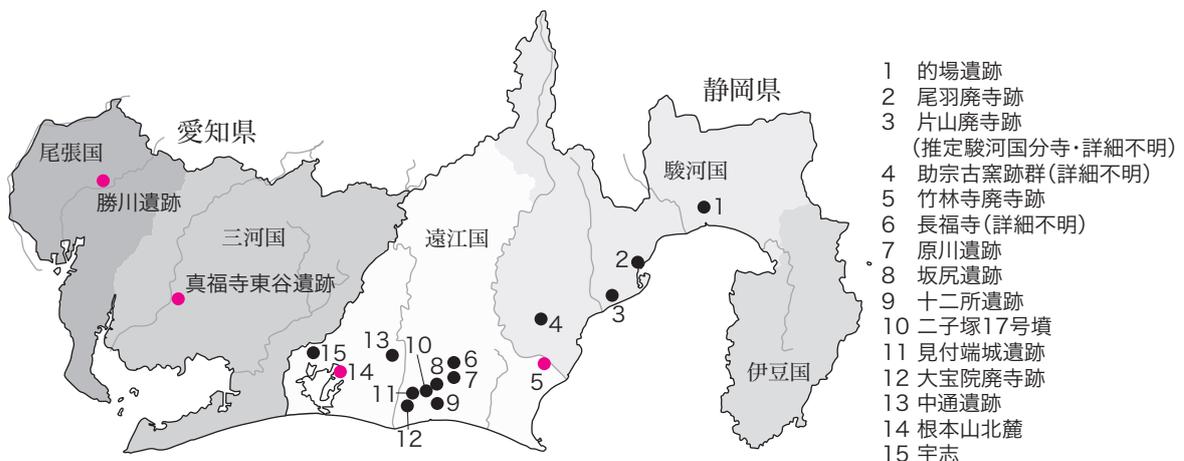


図1 静岡県の瓦塔分布図（赤丸が猿投窯型以前のもの）

の灰釉陶器が採集されており、造立に近い年代を示すものと考えられる\*。十二所遺跡では、8世紀代までの遺物はほとんどないが、9世紀代以降の灰釉陶器が出土した。瓦塔はこれに伴うものと考えた方がよい。このことから、遠江国域における猿投窯型瓦塔特にB2類の年代は、9世紀前葉に中心があったと考えておきたい。

遠江国東端である大井川西岸に位置する竹林寺廃寺跡（静岡県島田市）では、7世紀後半の瓦が出土する古代寺院の伽藍遺構が発掘されている。瓦塔は、金堂跡周辺の瓦溜内を中心とする伽藍各所から出土した。この瓦溜は、9世紀初頭のI期（創建期）伽藍の焼失後に瓦などを廃棄した土坑と考えられている。このことから瓦塔は、伽藍枢要部に立てられていたと考えられる。瓦塔は三重ないしは五重の方形多層塔に復元されるほどの出土量があったが、ここでは軸部の製作技法に注目しておきたい。

屋蓋部（図2-1・2）はBタイプで、丸瓦列に節が入る。隅降棟は若干の凹凸をとまなうだけの角棒状である。垂木はヘラ削り出しによる。屋蓋部上部は、上にある軸部の受け口として上方へ張り出すが、その上端は庇状になっている。この庇状の張り出しの下部には、丸瓦列に対応して短い垂木のような表現がある。一見すると裳階のようにもみえるが意図はわからない。類例としては門間遺跡（愛知県一宮市）や清林寺遺跡（同甚目寺町）の瓦塔が挙げられるが、猿投窯産瓦塔では確認されていない。

軸部上端は横および上方に張り出す（図2-3・4）。この張り出しは四辺を廻る粘土帯で、庇状粘土帯と呼ぶ。ただしこの粘土帯には垂下する組物表現（簾状粘土帯）が伴わない。その下部には、粘土板をヘラで切り欠きして成形した持送り表現が壁体に貼付けられる。持ち送りの下部には粘土帯が廻るが、組物表現を伴わないので壁付粘土帯とは異なる。線刻で表現された柱が下に取り付くので、長押を表現したものといえよう。空中・壁付粘土帯や突出した柱表現がない分、宇志出土瓦塔よりも凹凸が少ない印象を与える。ともかく、猿投窯型B2類を特徴づける技法はこの瓦塔ではみられない。この

\* 浜松市博物館2007。企画展では周辺採集の灰釉陶器・山茶碗が展示された。

ことは、竹林寺廃寺跡瓦塔が猿投窯型瓦塔の影響を受けない状況で製作されたことを示している。

竹林寺廃寺跡瓦塔と同じタイプの屋蓋部は根本山北麓（浜松市：図2-5）で採集されている。丸瓦列や垂木の表現技法は同一で、軸部片は組物表現が不明であるが、柱を表現した線刻があり全く相違点がない。すると同一タイプの瓦塔が、竹林寺廃寺跡と根本山という遠江国の東西に離れた地点で出土している点が注目される。このタイプの瓦塔は一寺院での造立のためだけに製作されたのではなく、一定の地域おそらく遠江国域の寺院などを対象としていた可能性が考えられよう。

これらの瓦塔と猿投窯型瓦塔との先後関係であるが、竹林寺廃寺跡での出土状況から9世紀初頭以前に瓦塔が立てられていたことは確実である。したがって先にみた遠江国域の猿投窯型B2類瓦塔の造立年代に先行する可能性が高いといえる。加えて瓦塔の軸部にみられる各種表現技法が猿投窯型B2類と共通していない点も、B2類に先行する位置づけであるならば理解できる。

## 8世紀前半の瓦塔

次に、竹林寺廃寺型瓦塔の軸部上端にある庇状粘土帯の時期的な位置付けについて、東海地域全体を通して検討してみよう。猿投窯産瓦塔の中では庇状粘土帯を採用する瓦塔は少なく、黒笹34号窯跡（愛知県三好町）から出土した複数個体の瓦塔群中に2点認められるだけである\*。黒笹34号窯は折戸10号窯期新段階～井ヶ谷78号窯期の須恵器窯であり、瓦塔も概ね9世紀初頭を中心とする時期で捉えられる。したがって8世紀後半段階の猿投窯産瓦塔に庇状粘土帯はないのである。猿投窯産をもとに猿投窯型瓦塔を設定する立場からすれば、最終段階に至って初めて庇状粘土帯が採用されたことになる。ただし、黒笹34号窯瓦塔群にみる猿投窯型の最終段階では、各種表現技法やその意図に混乱がみられる。この場合は凸形スタンプが認

\* 黒笹34号窯跡出土瓦塔の詳細は、同報告書（近刊）にて提示する。

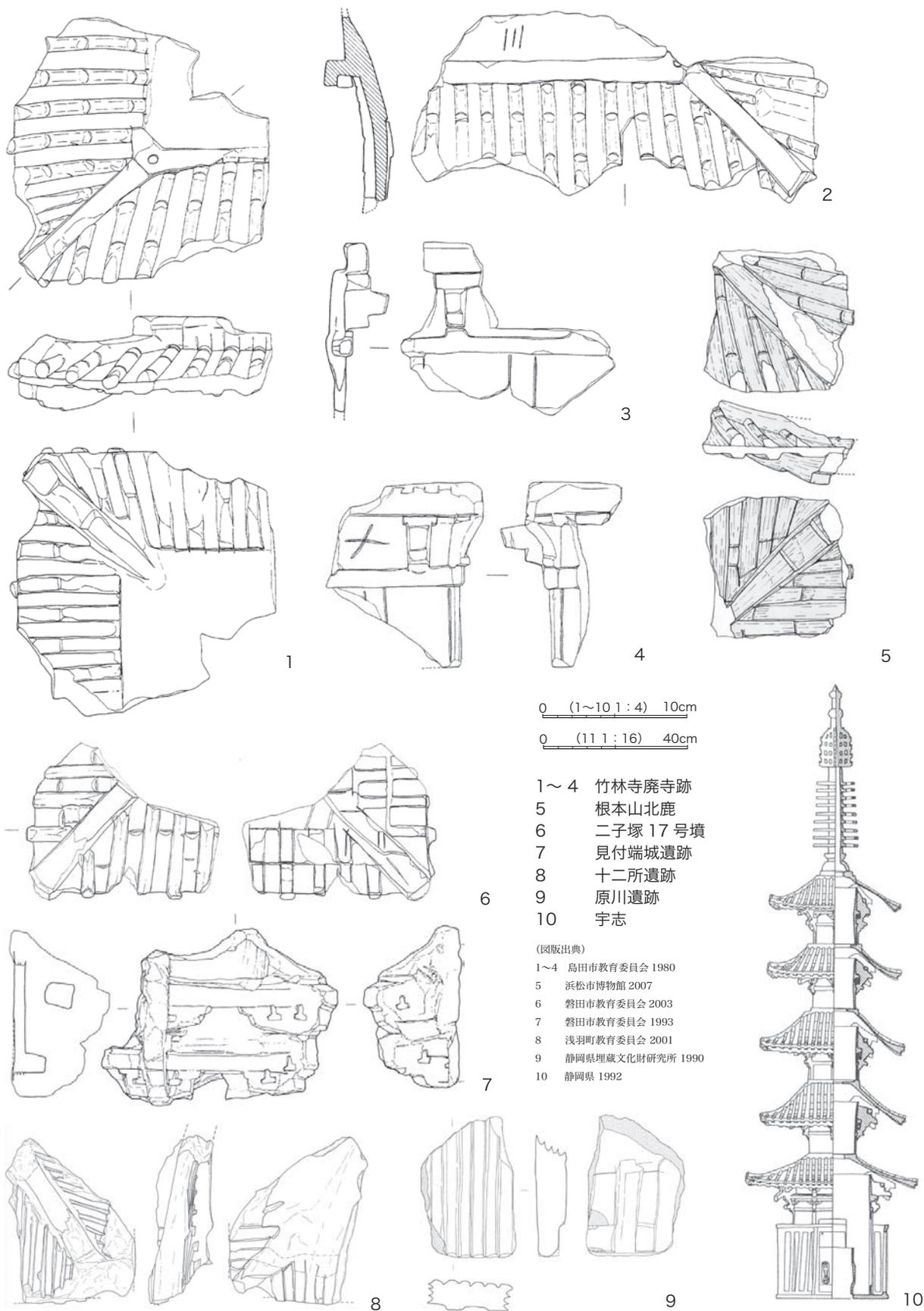
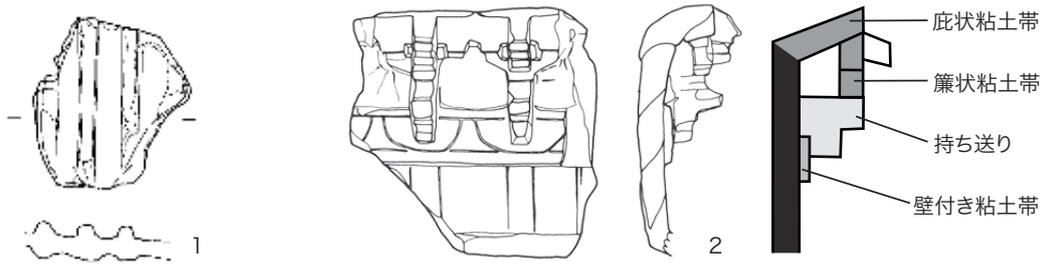
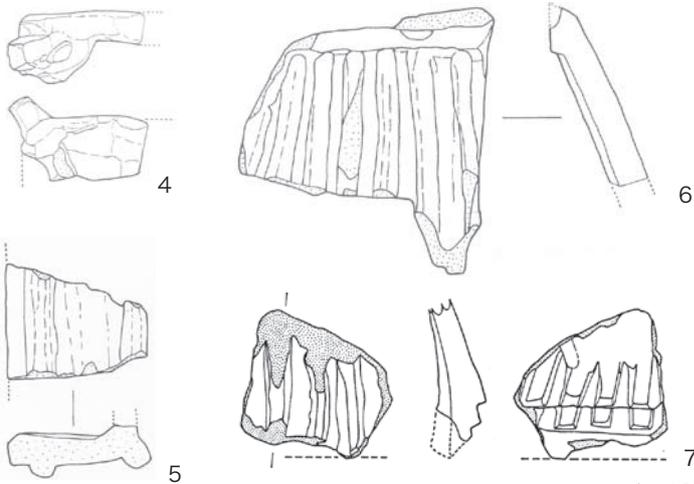
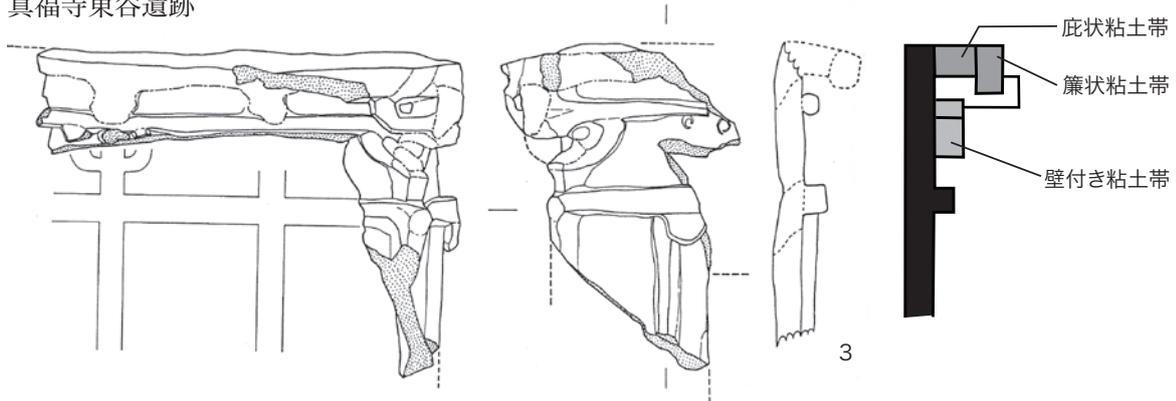


図2 遠江の瓦塔実測図

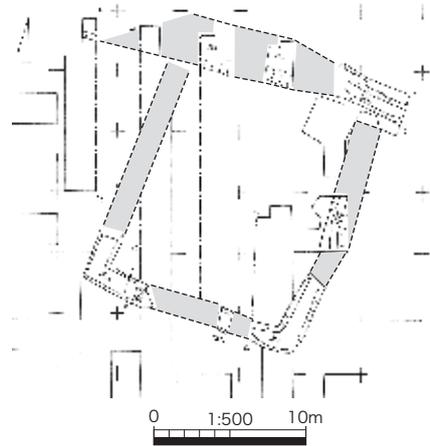
勝川遺跡



真福寺東谷遺跡



0 (1:4) 20cm



(岡崎市教育委員会 1982に加筆)

(図版出典)

- 1 愛知県埋蔵文化財センター 1989
- 2 愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 3・7 岡崎市史編纂委員会 1989
- 4~6 岡崎市教育委員会 1982

図3 尾張・三河の8世紀前半の瓦塔実測図

められるので猿投窯型としうるが、底状粘土帯の存在のみで瓦塔個体の時期は決めがたい。そこで凸形スタンプも空中粘土帯も併用しない、底状粘土帯のある瓦塔軸部を抽出し、その時期を検討してみよう。

尾張国域の勝川遺跡(愛知県春日井市)では2点の瓦塔が出土した。1点目は、寺院もしくは官衙と推測される区画内掘立柱建物群の付近

から瓦塔軸部である。出土遺構は東西溝 SD149で、鳴海 32 号窯期～折戸 10 号窯期古段階の須恵器が共存している。したがって8世紀後半の時点で既に瓦塔は廃棄状態にあったことになり、その制作年代は8世紀前半まで遡る可能性が高くなる。2点目は、段丘上の区画から南東へ約 140m 離れた苗田地区という沖積地の包含層中から出土した B タイプ屋蓋部である。両者

が同一個体であったかどうかは判じがたく、ここでは軸部のみをとりあげておく。

軸部は粘土紐積み上げで成形された壁体の上端を、外側へ広げるようにして庇状に成形する。これを庇状粘土帯とし、そこから垂下させた簾状粘土帯をへらで加工して組物表現を行う。凸形のくり抜きもへらによる。そして半ばには壁付粘土帯を貼付け、表面に線刻で組物を表現する。ちなみに柱の表現も線刻である。持ち送りは粘土板を切り出したものを壁付粘土帯の上に貼付けて下から簾状粘土帯を支える。焼成は硬質であるが、色調は褐色系で軟質な須恵器や瓦に似た印象を受ける。

三河国域の真福寺東谷遺跡（愛知県岡崎市）は矢作川左岸の丘陵上に立地する遺跡で、北野廃寺（同市）の軒丸瓦第Ⅰ類C形式と同文の軒丸瓦が出土する古代寺院である。瓦塔は丘陵頂部につくられた約15×20m規模の方形区画溝の中から出土した。区画内に瓦塔が立てられ瓦葺きの覆屋があったものと推測される。

瓦塔は屋蓋部と軸部があり、Bタイプ屋蓋部の丸瓦列に節はない。垂木は二軒であるが短い。またへらで目印線を線刻してから削り出す猿投窯型の垂木表現方法とは異なっている。軸部の上端に庇状粘土帯が付き、その下に取り付くように粘土塊を付加し、へらで加工して組物表現を行う。さらにその下に丸棒状粘土を貼付けてそれにも同様の組物表現を付加する。壁付粘土帯であるがへらで切り出した板状のものではないので、猿投窯型のそれとはほど遠い。

この瓦塔の年代について検討する。遺跡は中世陶器を包含する整地層で覆われる。区画溝の堆積層（黄褐色土層）は上・下層に区分される。下層では瓦と瓦塔のみが、上層では瓦・須恵器・灰釉陶器が出土する。ここでは下層から土器類が出土しないのが要点で、瓦と瓦塔の年代は、上層出土遺物が示す時期と隔たりがあることになる。上層出土の須恵器・灰釉陶器の年代は8世紀後半～10世紀である。したがって下層の時期は8世紀後半より遡る可能性が高くなる。

瓦の年代を考察する。北野廃寺跡では軒丸瓦第Ⅰ類A・B形式が7世紀後半と推定される。最も整った花卉の第Ⅰ類A形式をもとにB形式がつくられ、この2種類で軒丸瓦の大半を占

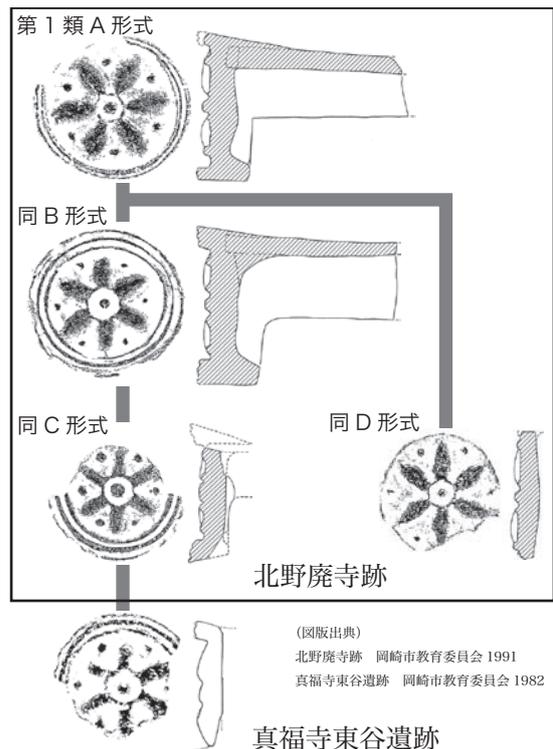


図4 真福寺東谷遺跡の軒丸瓦系譜

める。そしてB形式からC形式へより平面的な文様へ変化した。C形式は北野廃寺跡の創建期段階でも後出的な位置づけがなされる。それと同文の真福寺東谷遺跡出土軒丸瓦は、北野廃寺第Ⅰ類C形式に認められる裏面下半突帯がなく、制作技法の点からさらに時期が下ると考えられる。したがって瓦の年代は概ね8世紀前葉の可能性が高い。

出土層位と共伴する瓦の年代から、瓦塔もほぼ併行する時期ないしは少し後ろに幅を持たせて8世紀前半としておきたい。

以上の2つの瓦塔は、空中粘土帯や凸形スタンプといった猿投窯型の基準となる表現技法は用いられておらず、むしろ柱が面取りされない丸棒状であることや線刻で表現するなど、猿投窯型にみられない特徴がみられる。出土状況から推定される年代が8世紀前半を中心に考えられる点も加味すると、鳴海32号窯期に始まる猿投窯型瓦塔以前の瓦塔と位置づけられよう。これに竹林寺廃寺瓦塔を加えると、尾張・三河・遠江国域の猿投窯型以前の瓦塔では、庇状・簾状粘土帯が組物表現技法として採用されていたことが指摘できる。

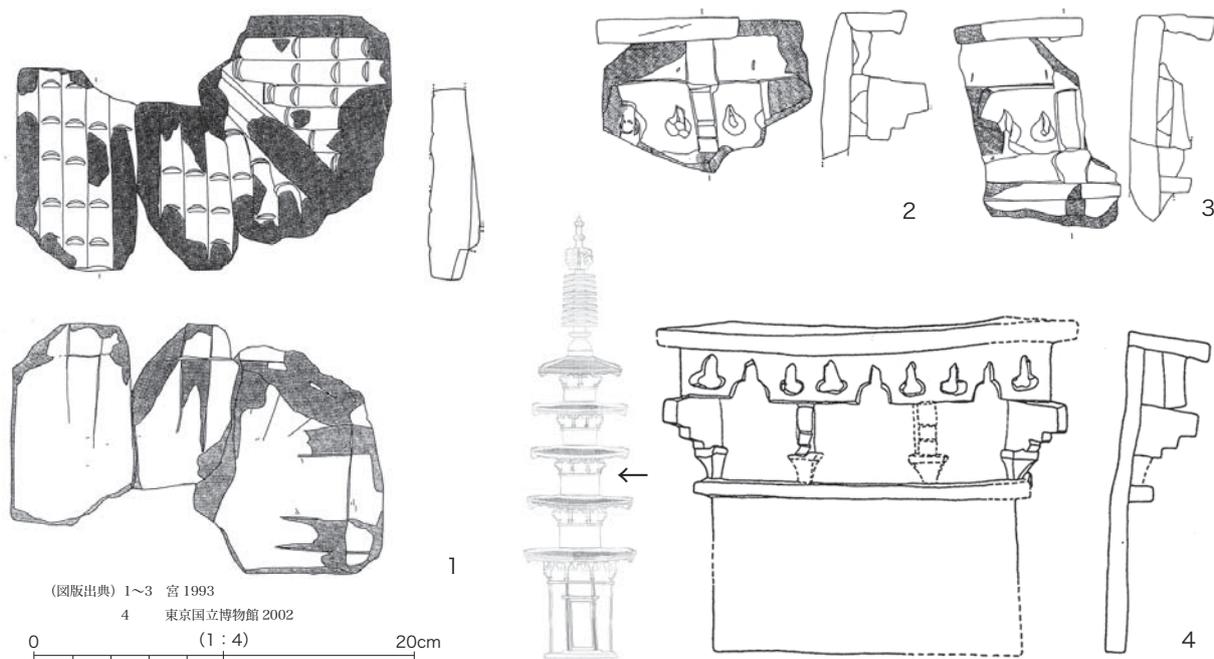


図5 関東地域の8世紀前～中葉の瓦塔実測図

## 東海地域と関東地域の瓦塔

尾張・三河・遠江国域における8世紀前半の瓦塔は、猿投窯型瓦塔ほど表現技法の共通化はみられず量産型であったとはいいがたい。しかし底状粘土帯によって軸部上端を補強しより安定的に屋蓋部を支えるとともに、簾状粘土帯によって複雑な構造をしている組物を、効果的に表現することに成功したといえる。東海地域の瓦塔は高い完成度に達していたのである。

そして簾状粘土帯は空中粘土帯の基礎となった。空中粘土帯は、ヘラや凸形スタンプで加工した部品を、壁体と粘土で連結し下から持ち送りで支える構造である。接合前に細工を行なうのが簾状粘土帯との違いで、粘土帯は薄い板状へと変化した。軽くなった分広い接合面は必要なくなり、底状粘土帯は用いられなくなった。それまで軸部上端の補強と屋蓋部の支持は底状粘土帯の役割であったが、空中粘土帯と壁体を連結する粘土および軸部四隅の持ち送りがこれに代わった。こうした工夫によって猿投窯における瓦塔の量産化が進められたのである。

このように、東海地域では8世紀代を通じて「地域型」瓦塔の発展がみられたのであるが、東日本特に関東地域における方形多層塔型瓦塔の展開と何か関わりがないのであろうか。

多武峰類型瓦塔\*の標識となる多武峰瓦塔遺跡瓦塔（埼玉県都幾川村：図5-1～3）は軸部上端に底状粘土帯が付く。しかし簾状粘土帯はなく、組物表現は壁付粘土帯でなされる。関東地域における簾状粘土帯の類例は、壁付粘土帯に比べて少数であることはあきらかである。多武峰類の後続類型では壁付粘土帯が主流であり、Aタイプ屋蓋部とともに関東地域の瓦塔の祖型であることは動かない。

一方、ほぼ全体が復元されたことで著名なNo.2遺跡瓦塔（東京都東村山市）も、多武峰類型である。その軸部上端（図5-4）には真横へ張り出した底状粘土帯があり、大きな凸形のくり抜きと切り欠きのある簾状粘土帯が垂下する。ちなみにこの凸形くり抜きは組物表現としては過度の強調であり、製作工人がその意図をよく理解していなかった現れである。そして下からは持ち送りがこれを支える。これを東海地域で位置づけるならば、勝川遺跡瓦塔の簾状粘土帯と猿投窯型の空中粘土帯の中間的存在となる。多武峰類の年代が8世紀中葉であることもこれに符合する。

これまで、No.2遺跡瓦塔は残存状況が極めて良好であったため、関東地域における瓦塔研究の基準資料でもあった。しかしながら地域で

\* 池田敏宏による関東地域の瓦塔屋蓋部分類である。池田2000。

主流の壁付粘土帯ではない点を考えるとむしろ特異な存在と見るべきであろう。そこで、地域外からもたらされた簾状粘土帯技法による瓦塔軸部をモデルに製作された可能性が考えられないだろうか\*。現在のところ東海地域から関東地域への搬入瓦塔は確認されていないが、製作工人が移動した形跡も見出しにくい。伝聞のようなかたちで東海地域の瓦塔に関する情報をもたらされ、多武峰類型の屋蓋部を作る瓦塔工人がこれを模倣したのではないだろうか。

さらには逆の情報伝達も考えられないだろうか。すなわち多武峰類型瓦塔のAタイプ屋蓋部が猿投窯型A類のモデルとなった可能性である。先にみたように東海地域の8世紀前半の瓦塔は全てBタイプ屋蓋部である。ところが猿投窯型瓦塔では鳴海32号窯期よりAタイプ屋蓋部も存在する。これの登場にどのようなきっかけがあったのか、東海地域の瓦塔を眺めているだけでは判然としない。尤も、日本列島全域におけるAタイプ屋蓋部のそもそものルーツがあきらかでない現在は想像の域を出ないが、8世紀前葉～中葉の東海道を経路にした瓦塔に関する往来を仮定してみるのも必要ではないか。

\* No.2 遺跡瓦塔に類似するものに伝・三ツ沢（神奈川県横浜）瓦塔がある。軸部上端には2段の粘土帯があると推定される。これも東海地域との関わりを注目したいところであるが詳細が不明であり今回は取り上げない。

## 付 兵庫県三田市金心寺廃寺跡の瓦塔

金心寺廃寺跡（兵庫県三田市）は摂津国有馬郡に属し、西は播磨国に接する。有馬郡内唯一の古代寺院である。藤原宮式に系譜をもつ軒瓦が出土することや井戸から出土した木材で測定した年輪年代\*によって、7世紀末～8世紀前葉に創建された古代寺院であると推定されている。しかしながら近世の城下町（屋敷町遺跡）と重複しており滅失した部分も多い。古代瓦の分布は約210×250mの範囲に限られ、おそらく伽藍の位置を示していると考えられる。瓦塔が出土した地点\*\*もそれぞれ近世の土坑や城下町

\* 光谷 2002。板材は7世紀前葉の年輪年代が確定したが、失われた辺材部を考慮して「700年代前半あたりの伐採年」が想定されるという。

\*\* 屋敷町2・3・19次発掘調査で瓦塔が出土した。

の整地層となっているが、瓦出土範囲と重なっており、伽藍内に立てられていたと考えられる。伴出遺物で瓦塔の時期は特定できないが、以下の観察により8世紀前葉～中葉の瓦塔と判ずるに至ったので紹介しておきたい。

瓦塔は2種類からなり、一つは方形多層塔（図6-1・2）である。1は屋蓋部で節の入った丸瓦列は幅1cmある。その軒先にはスタンプによる花卉が表現される。垂木は一軒で、平滑にした裏面を軒先から3.6cmのところまで斜めにへうで削ることで表出する。隅降棟の一部が残っており、そこから想定される屋蓋部一辺の長さは約33cmである。焼成は硬質で灰色であるが、一部は燻しがかかって黒色である。屋蓋部全体を通じて反りはない。2は軸部で、隅柱を中心に2面の壁体が残る破片である。一方の壁は柱から2.6cmのところ開口部があり初層軸部と考えられる。柱は円柱で、粘土紐積み上げで成形した壁体に棒状粘土を貼付けたものである。軸部上端は不明で組物表現があったかたどうかもわからないが、縦横の比率を考慮すると横幅約13cmと推定され1とほぼ組み合う大きさである。焼成は1ほど硬質ではないが良好で、褐色系の色調で表面は全体に燻しがかかって黒色である。

近隣での方形多層塔型瓦塔は、丹波国域の岩戸4号窯跡（兵庫県氷上郡：図6-5）で屋蓋部が出土しており、共伴する須恵器から8世紀中葉である。また山城国域の瀬後谷窯跡群推定4号窯灰原（京都府木津川市）でも8世紀前半の瓦塔が出土している。近畿地域の瓦塔の盛行が8世紀前～中葉と考えられこれに含めて考えておきたい。これらは個々の形態差が大きい、当該期東海地域の瓦塔も個体差が大きいことはこれまでみてきたとおりである。

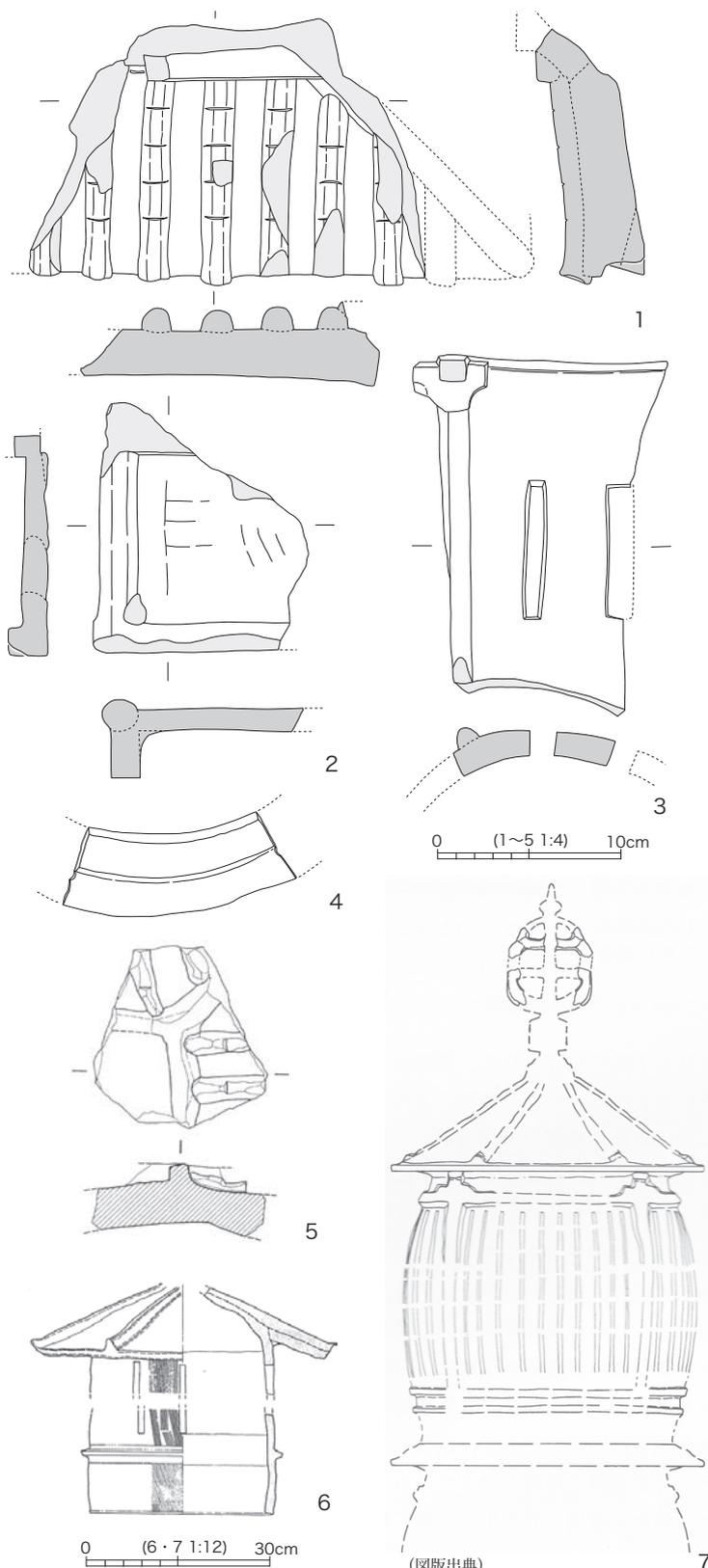
二つ目の瓦塔は円筒形の軸部で、3は円柱の上端に組物表現がある。壁面には7.6×1.4cmの透かしが入る。軸部直径は推定20cmである。焼成は硬質で須恵器と違和感がない。4はその基底部とみられる破片で、破断面に直径0.6cmの焼成前穿孔がある。穿孔は等間隔とすれば8ヶ所あったとみられる。焼成は硬質で明灰色である。

方形多層塔型は畿内から東日本で分布するの

だが、円筒形軸部の瓦塔はどうであろうか。円筒形軸部は西日本で広くみられる形態であるが、北部九州に分布するタイプは、透かしのない円筒形軸部である。一方播磨から吉備地域を中心とした瀬戸内海沿岸では個体差が大きいものの透かしが入る事例が多く（図6-5・6）、本例もこれに類する。分布域の東端にあつて方形多層塔型瓦塔の分布域との境界がここにあると、いってよいだろう。このように異型の瓦塔が一遺跡から出土する事例としては、猿投窯型と美濃須衛型が混在する尾張国音楽寺跡などが挙げられる。

（謝辞）

金心寺廃寺跡出土瓦塔の調査にあたっては、三田市歴史資料取蔵センターおよび山崎敏昭氏にご配慮いただき、種々ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。



1～4 金心寺廃寺跡 5 岩戸4号窯跡  
6 千本屋廃寺跡 7 八ガ遺跡

図6 金心寺廃寺跡と丹波・播磨・備前の瓦塔実測図

参考文献

愛知県教育サービスセンター編 1984『勝川』  
 愛知県埋蔵文化財センター編 1992『勝川遺跡III』  
 浅羽町教育委員会 2001『十二所居館 静岡県磐田郡浅羽町十二所居館発掘調査報告書』  
 池田敏宏 2000『瓦塔』『古代仏教系遺物集成・関東』考古学資料から古代を考える会事務局  
 稲垣晋也 1967『静岡県引佐郡三ヶ日町志山中発見瓦塔の復元について』『考古学雑誌』第53巻1号  
 磐田市教育委員会編 1993『見付端城遺跡発掘調査報告書』  
 磐田市教育委員会編 2000『大宝院廃寺遺跡第10・11次発掘調査報告書』  
 磐田市教育委員会編 2003『東部土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 岡崎市教育委員会編 1982『真福寺東谷遺跡』  
 岡崎市教育委員会編 1991『北野廃寺』  
 岡崎市史編纂委員会編 1989『岡崎市史』資料編14 考古(下)  
 岡崎市教育委員会編 2004『ハガ遺跡』  
 静岡県埋蔵文化財研究所編 1990『原川遺跡III』静岡県埋蔵文化財調査報告第24集  
 三田市教育委員会 1994『三田歴史講演会 さんだと金心寺』  
 静岡県 1992『静岡県史』資料編考古三  
 島田市教育委員会編 1980『竹林寺廃寺跡』  
 永井邦仁 2006『東海地方の古代瓦塔研究ノオト』『研究紀要』7 愛知県埋蔵文化財センター  
 永井邦仁 2008『猿投窯型瓦塔の展開(1)』『研究紀要』9 愛知県埋蔵文化財センター  
 浜松市博物館編 2007『三ヶ日町志出土瓦塔と遠江の古代瓦塔』  
 兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会編 1982『播磨千本屋廃寺跡』  
 光谷拓実 2002『屋敷町遺跡出土の井戸枠材の年輪年代』『市史研究さんだ』第5号  
 宮 昌之 1993『多武峰瓦塔遺跡出土の瓦塔』『埼玉県歴史資料館研究紀要』第15号埼玉県歴史資料館

(図版出典)  
 1～4 筆者実測  
 5 丹波三ツ塚遺跡発掘調査団 1983  
 6 兵庫県宍粟郡山崎町教育委員会 1982  
 7 岡山市教育委員会 2004